

和語による造語について

中 川 秀 太

1. はじめに

一般に、和語には造語力がないとされ、それに比べて漢語には旺盛な造語力があるとされる。玉村（1975）や玉村（1981）は、和語による造語に可能性を見いだす例外的研究である。現在は、漢語による造語も衰え、外来語の使用が増えているともされる。ただし外来語の場合は、日本人が新しい語を造語するということではなく、外国語特に英語からある語を取り入れ、カタカナに置き換えて（語形を整えて）使用するのが一般的である。このことから、新しい概念に対処するためには造語力が必要であるという議論がなされやすいのに対し、必ずしも造語が必要であるとは言えないのではないか、造語せずに借用すればよいという見方も導き出せる。以下では、過去に和語の造語力について語られてきたことを見直し、今後の和語の役割について、その見取り図をえがく。

2. 造語の是非

2.1 不要な造語

従来の議論は、造語が必要であるという前提のもとに行われてきた感があり、必要ないという観点からは論じられることが少ない（水谷（1978）に若干の言及がある）。それは、従来の議論が「多く専門領域にかかわる新造語」（玉村（1981, p.45））について行われてきたことにもよる。厳密な定義を要する専門語においては、句・文ではなく、単語が要ということはあるう

ることであるが、日常生活では、すでにそれ相応の数の語が存在する。玉村（1981, p.41）の「何世紀もまえに必要な基本語の大部分を形成しおえたのも和語である」との指摘は重要であり、また、各分野で江戸時代の文化が見直されている現在、その時代に存在したことを現代に活用することも十分にありうる。西洋を追いかけるのではなく、東洋を見直すという動きは、すでに他分野には見られることであり、古いことは悪であるとの見方は、その見方こそが古い。このように考えると、造語力うんぬんの前に、今の人間のためだけに安易に造語することを控える態度がまずは要る。このような視点から、造語の問題点を文法、意味、語彙の順に具体例を挙げて検討する。

2.1.1 文法

ここでは、造語により、語構成要素どうしの文法的関係が表面に表れないことを問題とする。「名前呼び」（学生）や「トイレ詰まり」（駅）といった語が使われることがあるが、「名前で呼ぶ」「トイレの詰まり」を語にする意味上の価値がない。何らかの価値があるとすれば、格助詞を用いて文を整えるのが送り手にとっておっくうだからということであり、これは米川（2022, p.54）が言う「ラク」と「楽しい」を第一に判断基準にする現代の「楽社会」の流れに合致する。正確な伝達ということは考慮されない。仮に格助詞の使い方が誰にとってもやさしいものであれば、その部分を省いた語を作ったり、単純に省略したりしても伝達上の問題はないかもしれない。しかし、実際には「女性を切りつける」「活字に渴望する」「育児を悩む」「料理を携わる」（いずれもテレビから）といった従来の使い方に添わない格助詞の使用が増えた。

「切（斬）りつける」について、やや詳しく述べる。従来の使い方では、「忍びこんだ賊数人が岡部長常に斬りつけて負傷させ」（中村彰彦『落花は枝に還らずとも（上）』2008、中央公論新社）というように、「XがYに切りつける」の形をとる。「切りかかる」と類義であるが、やいばが届いたという感じが「切りつける」のほうに強いと見る向きもある。「つける」の他動詞としての性質を考えるなら、そこに「XがYにZ（刃物）を切ってつける」という意味を見いだすこともできるが、実際には「切りつける」と言えば、刃物（昔なら刀、今ならナイフなど）であるのが普通であるため、「Zを」の

部分を表現する必要性が低い（時代小説などでは「XがYに～」のみで現れやすい）。もし必要なら、「刃物で」のようにデ格で示すことが可能である。「～に切りつける」の意義はこのように説明される。一方、「XがYを切りつける」という現代の用法の場合、「つける」の意義が不明確である。たとえば「頭をなぐりつける」という場合、「なぐる」よりも「なぐりつける」のほうが程度は強い。それと同じだと見なすと、「切る」より「切りつける」のほうが程度が強いことになるが、実際にはその逆である。「女性を切りつけた」であれば、ケガをしたという印象であるが、「女性を切った」であれば、致命傷を負ったか命を落としたかという印象となる（「オレは丈八を斬るぜ」（山平重樹『俠魁』1996、双葉社）とは「切って殺す」ということである）。したがって、強調のための「つける」という理屈は成り立ちにくい。実際に起こっていることは、「XがYを切る」の項構造がまず思い浮かび、程度を強めるのか弱めるのかは無自覚な状態のまま、「死に至る」との解釈を回避する程度の目的で「つける」を添えるということである。二つの使い方のメカニズムを見たらうで、どちらのスジがよいと感じられるか。新旧でも多数決でもなく、ことばの精妙さを感じさせるほうに軍配をあげるという道もある。

安易な造語は、①格助詞の運用能力に衰えが出る、②慣用に合わない使い方が生じる、③その何が悪いと強弁する、という悪循環につながりうる。造語の負の側面である。

2.1.2 意味

語を作ることにより、句と比べて意味が特殊化することがある。荻野（1987, p.21）は、行方不明の子どもを探して「山に登る」ことはあっても、そこに「山登り」を使うことはできないと述べる。複合名詞は「特に典型的なものをさすようになり」、「安易に複合語を生成することは意味を変えてしまうことにもなりかねない」と注意する。

造語により、意味が特殊化することと別に、筆者は、前述の「名前呼び」「トイレ詰まり」のように、単にことば（助詞・助動詞）を惜しんで安易に造語するということもさけるべきであると考え。造語には、この二つが負の側面として伴う。外国人学習者の身になって考えれば、以下の区別は、学習上

の困難となる。

(1) 句の表す意味から隔たりの大きい語。

(2) 句の表す意味から隔たりの小さい語。典型的な物事を指す。

(3) 句の表す意味と（ほぼ）同じ意味の語。

古い時代に作られた語には、不透明な意味を持ち（1）に該当するものが少なくない。一方、現代で意識的に造語する際は、（2）の語にとどめ、（3）は控えるのが適当である。典型的な場合を指す「山登り」を（2）の例、「トイレ詰まり」のように単に助詞を省略しただけであるものを（3）の例とすると、母語話者にとっては、その区別が容易であっても、非母語話者にとっては同じようにはいかない。（3）のタイプの語が臨時的にいくらでも作られてしまうと、その理解に難儀する人がいる可能性を考える必要がある。

2.1.3 語彙

既存（筆者の使う語形としてはキゾン）の語が存在するにもかかわらず、人々がそれを覚えないことにより、または、新奇さを求めて新たな語を使うことにより、世代間に語彙の断絶が生じる。一方、既存の語がなく、句で表現するのが一般的なところに造語が行われることもある。そのことが関連するほかの語とのバランスを崩す要因となりうる例として、「表記ゆれ」を取り上げる。『デジタル大辞泉 アプリ版』に見出しがある。言語学では「発音のゆれ」「語形のゆれ」「アクセントのゆれ」「意味のゆれ」「文法のゆれ」といった言い方が行われることがあるが、「の」を省いた形は一般的ではない。これらのうち、表記のみ「表記ゆれ」という語で表すことになれば、語彙のバランスが悪くなり、合理的ではない。したがって、「表記ゆれ」という語は必要がない。もしかすると、発音や語形、アクセントはゆれという現象として捉えられるという感覚があまりなく、意味や文法の場合は、ゆれよりも誤用ということばで意識しやすいのに対し、表記は、漢字かカナかというふうに、○×以外のゆれの問題として捉えやすい、そして「の」を省いて「表記ゆれ」と呼んでしまえば楽だ、という感覚で「表記ゆれ」が一般の人ないし一部の研究者によって使われるのであるとするなら、そのこと自体が、表記にばかり目の行きがちな日本人の性質を表しているということもできる。

校正・校閲、印刷といった、表記に関わりの深い分野から出てきた可能性もある。ただし、その分野であっても、問題になるのは表記のみならず、意味、文法、語形であることもある。人によっては、語形を「読み」という用語で間に合わせている可能性もあるが、すべて異なる事柄を表す。それゆえ、表記のみに「の」を省いた語を設ける特段の理由はない。

3. 和語による造語

3.1 品詞

和語の造語力が弱いと見る場合、それはもっぱら名詞の問題である（阪倉（1967））。漢語・外来語の形容動詞を使うことにより、和語の形容詞が作りにくいという事情もある。それ以外の品詞、つまり動詞（特に複合動詞）、副詞、接続詞、感動詞といった品詞においては、和語を用いた新語が生まれることがあり、漢語・外来語との比較は不要である。

3.2 抽象的な概念と語種

3.2.1 語種の比較

西尾（1965, p.30）は、和語の弱点として「造語力に乏しい」「抽象的概念を表わす語に乏しい」「語の品格が低い」「語形が長くなりがちだ」「音が単調だ」を挙げる。なぜ抽象的概念を表す語が少ないか。それは古来、日本人が「恋愛と花鳥風月」（大野（1960, p.121））という、情緒的な事柄には強い関心をいだいても、抽象的・論理的な事柄には興味をいだくことが少なかったという歴史的事情による。また、そのような分野に強い中国から漢字・漢語がもたらされたことにより、仏教や儒教に由来する抽象的な語彙をそのまま使うようになったためである。したがって、「弱い」ことについての責任は、和語ではなく、借り物に弱い日本人にある。大野（1960, p.120）は、「忠」も「孝」も「民主主義」も、もとはシナ語であり、ヤマトコトバでこれを表わすことはほとんどできない」と述べる。そこからさらに、一つ一つの漢字で意味が表せる漢語は造語に向くという論が展開されるのが一般

的であるが、抽象的な意味の漢語は、多くの日本人にとって借り物である点に注意する必要がある。借り物ゆえに頭ではわかっていても実感が伴わない恐れがつきまとう。「臣下の務め」とか「親を敬う、大切にする」といった具体的な意味を持つことばにひらかないと、よく理解したことにはならない。津田（2021, p.91）は、「忠」と「孝」などの徳目は、「生活から離れた抽象的概念であり、現実の道德生活を指導するはたらきをもたぬ」としたうえで、「これが異民族の間に発生した異国民の思想であり、儒教道德の本質なのである」と述べる。中国語に抽象的概念を表す語が豊富にあるのに対して、和語にそれが不足することは事実であるが、和語の不足を補うために取り入れた中国語由来の漢語は、あくまで借り物であり、それが生活実感の伴う語になるには、日常生活の中ですり切れるまでに使い続ける必要がある。しかし、書物の上でのみ接する抽象的概念には生活が伴わないため、一般人にとっては、いつまでも難しいことばのままである。それゆえ、厳密な「定義」が必要となり、その中身は勉強を通して身につけることになる。漢字を見れば「わかったような気になる」、カタカナの外来語は「わからない」、それゆえ漢字を使うほうがわかりやすいという論に流れる傾向にあり、漢字で何となくわかるほうが望ましいとも指摘されるが、筆者は、そうは考えない。わかったような気になって、きちんと学ぶという段階を経ない態度にむしろ恐ろしさを覚える。カタカナ表記の外来語の場合は、語形から意味が推測できなければ、意味を確かめようという気になる可能性を持つ分、抽象的な語彙のあり方としては、望ましい（安易にわかった気にならないよう、その語形・表記が警告を発していると解釈することも可能である）。不思議なことに、造語力について語る論者の多くは、和語と漢語を比較し、和語に抽象的語彙が乏しいことを指摘するものの、外来語の抽象的語彙にはふれることが少ない。それがもし、漢字・漢語を推奨するために和語をダシに使っていることを意味するのであれば、不当な処置である。外来語には、洋の東西の違いはあれども、抽象的な概念は豊富にあり、それを借り物であるとして同じく借り物の漢語によって翻訳することに、どれほどの意味があるのか、という問題設定が要る。たとえば哲学を学ぶ人が哲学について多くを語れるのは、その人がそれだけの勉強をしたからであり、「フィロソフィー」の代わりに「哲学」

を使うからではない。外来語よりも漢語がすぐれると主張するには、一般人にとって、「哲学」のほうが「フィロソフィー」よりも、その概念を理解するのに明らかに貢献度が高いという証拠を示す必要がある。

現在、漢語への翻訳が活発ではなく、外来語がそのまま使われることの多い理由、また、既存の漢語の一部が外来語に置き換わっている事実がある理由は、借り物を借り物で翻訳することの手間よりも、借り物をそのまま使うほうが便利だと人々が気づいたからである。その際、理解度の面から問題になるのは、その外来語の「定義」「語釈」「意味」を日常的に使う和語ないし漢語によって、どれだけ正確かつわかりやすく説明することができるか、ということである。たとえば経済分野で使われる「デカップリング」という語について、ラジオ番組の出演者が「デカップリングっていいですよ」と発言したのに対して、司会者がすかさず「切り離しですか」と応答した場面があった（2023年4月11日、ニッポン放送）。これなどは「切り離し」でおおよその意味をかみ砕いて説明し、残りは話の中で詳しく聞き手（リスナー）に向けて説明するというかっこうである。漢語で「分離」としたのでは、耳で聞いてわかりにくくなるから、使う意味がない。このように、抽象的概念を表す外来語の名詞に対して、その説明に和語を活用するというのがこれからの日本語にとって、現実的なあり方となる。

3.2.2 抽象的概念と和語

次の議論に進む前に、和語で抽象的概念を表す語が作れないのか否かについて、先行研究をもとにしてまとめておく。大野（1960, pp.122-123）によれば、ドイツ語では「概念」に相当することばは Begriff であり、「griff はツカムという基本語の変形である」という。ドイツの人は「自身の言葉で抽象的思考をいとなみ、造語する慣習」を持つのにに対して、日本人が「概念」を「つかみ」「つかみとり」に変えれば「おかしく感じる」のは、「生活に結びついた基本語で思考をいとなみ、造語する慣習を持たないからである」とされる。ここまで突き放して考えるならば、「動詞の一活用形の転用である」という点において、動詞とつよい有契性」を持つことや、「ことがらを、「こと」「もの」として純粹に概念化して表わし得る漢語名詞の抽象度の高さに

は及び得ない」などという和語に対する否定的な評価(阪倉(1967, p.161))は、日本人が和語を使って、抽象的な思考を巡らす鍛錬を怠っていたことによると見ることができる。漢語という選択肢がなく、それでいながら自身で抽象的な事柄を考えざるをえない歴史の中に身を置いたならば、動詞連用形名詞を使って、それ相応の抽象語を生み出したはずであり、現に、茶道には「わび」「さび」が存在する(岩淵ほか(1978, p.14))。

たとえば「ひらき」「あき」などの連用形名詞が「ひらく」「あく」という動作とのつながりが強く、漢語「開」ほどの抽象度を持たないと考え、「開店」「開館」「開場」などの語が生まれた事実を重視するとする。しかし現在では「開～」の語をさけて、外来語の「オープン」で済まそうとする動きがある。つまり、後述するように、漢字・漢語を用いて、語の表面に一つ一つの概念をきちきちと表そうとするよりも、上記の例で言えば、場所の要素は語に反映させず、「オープン」の意味を「ひらく」よりも限定的に用いるという流れがあり、それで不自由はないということである(今のところ「口をオープンする」などとは言わない)。阪倉(1967, p.162)の言う「単に二つの文字(語)を直接的に結合するだけで、両者はたがいに意義の方向を限定しあって、一つの論理的なまとまりをもつ意義をしめすことができる」漢語の特徴は、それ自体は事実であっても、そのような特徴がいつの時代にも人々に好まれるかどうか、ということについては、決して不変のものであるとは言えない、ということである¹⁾。

3.3 漢語による西洋語の受け入れに対する評価

和語の造語力を考えるとき、論者の主張に影を落とす要因となっているのが、いわゆる明治維新のあと、西洋語を漢語に翻訳してから取り入れたことについて、それをよしとするか否かという、論者自身の評価である。多くの西洋語を漢語に翻訳したこと自体は事実であるが、それが近代化を推し進めたというのは主観的な評価であり、その正しさを証明するには、外来語をそのまま取り入れた場合との比較を行い、明らかに漢語による翻訳のほうがすぐれているという結果を得る必要がある。事実と評価をともに記すことには反対しないが、その区別には自覚的であることが求められる。

当時の漢語による取り入れを肯定する立場に立つと、和語で対処しようとする(した)ことに対して、否定的な見方に傾く。たとえば野村(1977, p.275)は、幕末明治期の状況について「つぎつぎとおしよせる西洋文明の概念は、あまりにも異質なものであった。仮に、和語による造語をおこなったとしても、それは、いたずらに語彙体系を混乱させることにほかならなかったであろう」と述べる。これに対して「異質なものであるなら翻訳せずに取り入れてはどうか」「西洋由来の語を使う必要に迫られたのは主にエリート層ではないか」「外来語に厳密な定義を施し、一般庶民の使用語彙に組み込む際には細心の注意を施せばよいのではないか」「漢語の新造により、人々は幸せになったか、その漢語は十分な伝達機能を持ちえたか」「『郵便』とは何だ。ああ『飛脚』のことか、という逸話があるが、既存の語を捨てて、新しい漢語を使うことに『理解』の面で意味があるのか否か」といった疑問がわく²⁾。

前述の阪倉(1967, p.160)も、漢語による翻訳に肯定的な立場であるため、「明治初年の「ものわりのはしご」や、「鉄道(まがねち)」などという滑稽な言いかえ」と評しているが、本当にこの試みは「こっけいなこと」であるか。

視点を变えて、幕末明治期に漢語を新しく用いたのは過ちであったと考える。すると、「明治の初めごろまでに無秩序に新しい漢語をどんどん作りすぎた」ので、同音異義語が増えすぎたという見方が可能となる(野元(1976, p.28))。中国語の場合は、音節構造が複雑であるため、日本語と同様の問題は生じにくい。ともに漢字・漢語で西洋語に立ち向かったと単純化すると、発音の面での日中の差が見えなくなる。

幕末明治期の「硬文体は、漢文または漢文調の文章であって、そのため、その文体にふさわしい漢語がやたらにつくられた」(高橋(1983, p.29))という指摘がある。明治維新を経て四民平等になったのが真実ならば、元武士が使おうとする難しいことばづかいに対して、元町人・元農民が自分たちにもわかることばで言ってくれとやり返すのが健全な道であったが、実際には、元町人・元農民が元武士のマネをしようとして、なまかじりの漢語をよくわからないまま使うという世の中になった。これは現代に持ち越され、「あけすけに」「買いかぶる」「根をおろす」よりも、「開放的に」「過大評価する」「定着する」を好むところとなり、「全体に生硬になり、ぎこちなくなった」(芳

賀（1979, p.7)）。現代人がややもすれば難しい漢語や外来語でことばを飾ろうとしたり、その反対に、使える俗語ばかりで言語生活を送ろうとしたりする極端な傾向は、幕末明治期に庶民の感覚または江戸時代の知恵を生かし、穏やかに日本語の近代化を進める、という道を歩まなかったからこそ生じた、そう考えれば、漢字・漢語に対する楽観的な見方は不可能となる³⁾。

このような前提のもとに「こっけい」と評された語について、別の論者の指摘を見ると、犬飼（2002, p.27）に「せっかく生産した「とおめがね」を捨てて「望遠鏡」にかえた」というものがある。「遠乗り」「遠出」の和語「とお」を生かす道であり、日本最古のマラソンと称される「安中遠足」（安中藩主の板倉勝明が1855年（安政2年）に行ったもの）では、「えんそく」ではなく「とおあし」の語形が使われる。これらを「望遠鏡」「遠足（えんそく）」に変える合理的な理由はない（実際に慣用として漢語を使うではないか、というのは後世の人間の意識であり、当時の人のものではない）。新しい漢語に目を奪われ、そのまま使えばよかった和語をどれほどむだにしたか、という観点から幕末明治期を眺める目が要る。「はりがねの道（電話のこと）」や「くろがねの道（鉄道のこと）」について、岩淵ほか（1978, p.19）の中で斎藤修一氏は「考えてみますと、フランス語なんか鉄道というのは、まさに「くろがねの道」なんですね」と指摘する。つまり、「くろがねの道」を「こっけい」だと見、また「長すぎる」と考えるのは、漢字を使って短く表現する漢語が存在することによる相対的評価に過ぎず、言語一般の話として見れば、こっけいでも何でもない⁴⁾。阪倉（1967, pp.168-169）は、今後の造語としては「平和を語る会」「冷たい戦争」のような、「擬似複合語」が「しだい」にふえつつある」と述べる。「の」を用いる「きょうのニュース」が「茶の間」「床の間」と比べて、「熟合意識に個人差がある」（堀井（1965, p.190））と評されるのも、文節をこえた句の形式であることから来る結果であり、すでに熟語と見なされる「ひのき」のような語についても、「今日ひのきが単一概念（檜）を喚起するとしても、古くは松・の・木 杉・の・木 樫・の・木 などと並んで火・の・木として考へられて居つたかも知れないのである」という指摘を合わせて考えるならば（時枝（1939, p.301））、次のような進め方が考えられる。

- (4) 和語による造語において、「くろがねの道」方式のことばを最初から論外とする見方を捨て、日本人にとって、なじみのある「～の～」の形式を生かすという考え方をする。最初は、外来語（漢語）などの語釈、ないし類語として提示する。無理に言いかえ語として使うことはしない。言い添え、説明の文言として使う。そのうちに、人々の間に自然に「～の～」がなじむようになり、外来語よりもむしろ使いやすい、という状態になるのを待つ。十分になじむ外来語なら、そのまま使う。

これまでの人為的な言いかえの試みは、性急に行い、あまり効果が上がることなく終わっている。適当なことばを用意し、しばらく待つというやり方があってもよい。

4. 外来語の扱い

外来語の採用には「必要に迫られたもの」という条件が要る。新しいことだけを求める、ムード的な採用には反対する。日本語にない概念を表す語などは、積極的に取り入れればよいと見ることに加え、その語の輸入元は英語に限ることなく、世界中の言語から、よいものは取り入れるという視野の広さを要する。外来語＝英語ではない。それら外来語の借用により、西尾(1965)により指摘された「音が単調」という和語の弱点が補える。漢字で音を隠すことのできる漢語と異なり、カタカナで書く外来語の場合は、語形で自己アピールを行わなければならない分、同音異義語の問題が和らぐ方向へと語彙体系が変化することが期待できる。ただし、略語をどうするかという問題が残る。これらを考えるにあたり、国立国語研究所で検討された176語の外来語について、語形の面から眺める。すると、「ケア」「コア」「スタンス」「ツール」の4語を除き、「アーカイブ」「ライフライン」など、残りの172語には、日本語で同音語が存在しない。拍数は、2拍(3語)、3拍(8語)、4拍(21語)、5拍(30語)、6拍(48語)、7拍(27語)、8拍(22語)、9拍(12語)、10拍(3語)、11拍(1語)、12拍(1語)、という内訳となり、5拍以上

の語が少なくない。このうち、「アイデンティティー」には、一般的な略語がないことが注目される（この語の持つ意味が略語化による「扱いの軽さ」が生まれることへの歯止めとなっている可能性もある）。かつて鈴木(1985, p.7)で「発音しにくいことばが、広く定着する気配を見せている」と評された7拍（音節数は4）の「アイデンティティー」が略語化を被ることもなく盛んに使われる状況は、日本人の持つ「拍数が長いから略語にする」という固定観念を揺るがす。長めの外来語をそのまま使うという意識が育てば、「語形が長くなりがちだ」と評された和語についても、漢語への置き換えが不要であるとの好循環につながりうる可能性がある。つまり語形の面から言えば、和語・漢語に対する外来語という従来の見方ではなく、和語・外来語に対する漢語という見方が浮かび上がってくる。

以上のように、言いかえ対象となった外来語は、音を聞いても意味がわからない語として見るべきではなく、同音語のない語形のことばを欲する現代人の潜在意識の表れであると考える⁵⁾。言いかえ語の「自己同一性」や「自己認識」は「アイデンティティー」の理解には結びつきにくい。「自己」や「同一」の意味がわかっても、それが全体の意味にどのようにかわるのかは素人にはわかりにくいことであり、結局のところ、必要なのは、語の説明がわかりやすいことばで詳しく、かつ正確に行われるかどうかということである。定義・説明には、和語が活躍しうる。

したがって、これから新たに使われる外来語に対して国がなすべきことは、外来語の言いかえを強いることではなく、外来語の略語化に規制を設けることである（すでに定着している「テレビ(ジョン)」などは略語やむなしとする）。たとえば、公的な場で使うことば（標準語）における略語の扱いとして、①略語化しない、②「ビデオテープ→ビデオ」「ニュースキャスター→キャスター」のように、下略・上略による略語であり、video・casterのように、それ自身、原語の単語に相当するものを使う、③televisionに対するテレビのように、語の切れ目が原語とは一致しないものの、外来語としては下略ないし上略として機能する略語を使う、④これらの際、同音語がほかになければ、うまく日本語として役に立つと見なす、⑤「セクシュアルハラスメント→セクハラ」のような多項省略は、俗っぽさの生じる恐れなどがあるため原則として使わ

ない、⑥わかりやすいアルファベット略語を工夫して使う、というようなステップが考えられる。このような規制をしかるべき分野のおとなが厳密に行っていれば、一般の人の言語生活においても、それをまねようという動きが生じうる。模範的行動をとるおとなが存在しなければ、現状のままである。実験的に、何らかの形でペナルティー（罰則）を設けることも一つの手である。

5. おわりに

造語を論じる際には、語彙全体を考える必要がある。どれほどの語彙が日本語に必要なか、広い世代に通用する語彙の範囲とはどういうものか（屋名池（2004）の用語で「汎世代語」と呼ばれるもの）。フランス語などを参考にして、減らせる語がないかどうかを考えることが大切なことであるが、ややもすれば従来は、語彙は語彙、造語は造語として論じられ、両者の調整が欠けていた。たとえば語彙の側から同音語を減らしたいとの要請が出て、それに応じて、造語の側では語を作るのか、外来語を使うのか議論するとの流れが要る。

外来語を使う際には、どこまでの範囲を外来語でカバーするのかについての検討も要る。IやHeのような代名詞まで外来語として使うことを想定するのか否か。そういったものも認めた場合に、警戒が要るのは、英語と外来語との区別意識が薄れることである。英語教室に通う小さな子どもが Oh my god! と教室の外で口にするという事例が報告されている。多くの家庭でそのような現象が起これば、「オーマイゴッド」とカタカナに置き換えて外来語としても通じるという捉え方が出てもおかしくない。静かに英語による日本の侵略が進んでいる事象として見ることもできなくはない。「お茶が入りましたよ」よりも「お茶を入れましたよ」を好む日本人が現れているとの話も聞く。必要に応じて外国語を取り入れ、外来語として使うという原則が崩れ、外国語として学んだはずの英語が徐々に（急速に）日本語の世界を切り崩していくという事態にならないようにするための手だてを考える必要がある。

造語をするとなった場合は、文字に頼らずに済むことを重く見、和語によ

る造語（連用形名詞も含む）を考える。ただし特に抽象概念を表す名詞については、和語が使いにくいところであり、外来語をそのまま使うこととするものの、語釈に和語の言いかえ語、言い添え語を備えておき、外来語に代わって使いうる余地を残しておく。いわば「守りの姿勢」で和語を生かす道である。一方、将来的に外国語の中で通用しうる日本語の語を整えておくということも要る。かつて筆者は、イギリス BBC の「刑事ジョン・ルーサー」というドラマの中で、黙秘する容疑者に対して、刑事が日本語の Hikikomori の状態だと評した場面を見たことがある。「ひきこもり」のように、概念そのものが日本に特徴的であり、ほかの言語に取り入れられた際に同音衝突の生じにくい語（日本語で同音語がないこと、さらに外国語に同音語（と言えそうな語）がないことが条件）があれば、そのまま外国語の中で使われる可能性が見えてくる。これは「攻めの姿勢」で和語を使うということである。

最後に残る和語の問題は、「語の品格が低い」（西尾（1965））という特徴である。これは和語自体の問題ではなく、卑俗な発想のもとに手近な和語を使って新語を作るという根深い日本人の習癖にある。専門的な分野における和語を用いた造語に卑俗な感じがしないのは、それが必要に迫られて行った造語であるためである。現代日本人に求められるのは、「むやみにスラングをまじえることは品位をそこなひ、不快・嫌悪の念をもよほさしめる以外に、おほくの用をなしえない」ことに留意しつつ、「品位ある口頭語の発達（以上、山田（1977, p.162））」という理念のもとに、俗な感じのしない、耳に心地よく、できうるなら外国の人にすすめても恥ずかしくない和語（一般語も専門語も含む）を作ろうとする強い意志である。なお、句の形で使えば十分ではないかという場合に安易に造語すれば、それだけでも俗語の感が出てきうる。

注

- 1) 和語の用言には、「とる」「かたい」など、意味の幅が広いものが多く、「取る」「採る」、「固い」「硬い」などの漢字表記により意味の限定が可能となるとか、「たてる」よりも「建築」「建設」「建造」など漢語のほうが限定的な意味を表せるとかといった見方で和語と漢語を比べることがあるが、これは意味の広い狭いの議論であって、抽象的概念を表す語の有無とは別問題

である。なお、漢字を使えば、語の意味を包括的に理解することが妨げられるというリスクもある。たとえば「ハード」「ソフト」といった外来語の多義的な意味を人々はどう使い分けるか。カタカナで書く以上、漢字には頼れないが、うまく使いこなしてはいないか。和語の場合は、たまたま漢字があり、それで意味の限定ができるというだけの話であり、カナで書くと、意味の限定ができなくなるというわけではない。漢字があることによって、文脈から意味を理解する力を奪われていないかどうか。

- 2) 野村(1977)からの引用は、日本語学における一般的な捉え方を示すために行ったものであり、かつ、同論の語構成ないし造語の分野への影響力が大きかったことを重んじるからでもある。同氏が和語ないし外来語による造語に今後の可能性を求めていることについては、野村(2016)を参照。
- 3) 『日本語の歴史 6 新しい国語への歩み』(1965年、平凡社)の中に明治維新(およびそこで生じた漢字・漢語の流行)について楽観的な見方をする事への警告が記されている。それについて、陳(2019, p.10)は「こういう批判に直面する時期が来ているのではなかろうか」と述べる。
- 4) 新政府の人間としては、人々から江戸の記憶を奪うために漢語による造語を大量に行い、そのことを証明する資料は、燃やすなどして処分したのかもしれない。ところが、のちの世の人間は、漢語による翻訳を偉業として捉え、自分たちのことを美化してくれていると、彼らはあの世から現代人を眺めているかもしれない。死後の世界があるかどうかはわからない(「ない」とは言わない)が、このようないわば頭の体操が可能になるだけの時間がすでにたっている。
- 5) 外国語にも同音語があるものの、日本語のそれが持つ特徴は「ほとんど同じ、あるいはきわめて関連の深い意味領域、概念系の中に二つあるいはそれ以上の同音語が多数共存している点」にある(鈴木(1978, p.2))。その問題を解決するために漢字を使うというのが従来の発想であったが、話しことばで漢字は役に立たない。外来語が流行する背景には、似た意味のことばが漢字を見なければ判別できないことへの煩わしさを取

り払おうとする人々の気持ちが働いている可能性がある。たとえば国分、千葉（2021, p.17）には、「意志」と「意識」は「音が似ているから混同しがちです。むしろ英語で考えたほうがわかりやすい。「意志」と「意識」は「ウィル」と「コンシャスネス」ですから、まったく別物ですね」との指摘がある。明確な語形の違いによって（類義語の）意味の違いを意識しやすくなる。そのために外来語を使うという発想である。

参考文献

- 犬飼隆（2002）「外国語・外来語とその表記」『日本語の文字・表記』国立国語研究所
- 岩淵悦太郎，斎藤修一，千宗室，竹西寛子（1978）「和語 漢語をめぐる」『「ことば」シリーズ 8 和語漢語』大蔵省印刷局
- 大野晋（1960）「日本語の造語力」『国語改革論争』くろしお出版
- 荻野綱男（1987）「名詞辞書に含まれるべき見出しの範囲」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究 8 IPAL 補完文法』情報処理振興事業協会
- 亀井孝，大藤時彦，山田俊雄（2007a）『日本語の歴史 6 新しい国語への歩み』平凡社
- 亀井孝，大藤時彦，山田俊雄（2007b）『日本語の歴史 7 世界のなかの日本語』平凡社
- 木村義之（2019）「語彙の創造」『シリーズ〈日本語の語彙〉1 語彙の原理』朝倉書店
- 国分功一郎，千葉雅也（2021）『言語が消滅する前に』幻冬舎
- 斎藤倫明（1992）「和語の造語力」『日本語学』11-5
- 阪倉篤義（1959）「固有の日本語の造語力」『言語生活』97
- 阪倉篤義（1966）『語構成の研究』角川書店
- 阪倉篤義（1967）「「日本語」の造語力」『ことばの生活 2 ことばで考える』筑摩書房
- 鈴木孝夫（1978）「日本語の特色」『東書中学国語』214
- 鈴木孝夫（1985）「洋語の現状と将来」『日本語学』4-9

- 高橋太郎（1983）「事実と歴史と文字論と」『教育国語』75
- 玉村文郎（1975）「和語は造語力が弱いか」『新・日本語講座 1 現代日本語の単語と文字』汐文社
- 玉村文郎（1981）「和語のはたらき」『言語生活』359
- 陳力衛（2019）『近代知の翻訳と伝播』三省堂
- 津田左右吉（2021）『明治維新の研究』毎日ワNZ（同書の冒頭には「本書は、著者が昭和22年から最晩年に至るまでに月刊誌等に発表した明治維新に関する論文を集め、新たに編集したもの」とある）
- 時枝誠記（1939）「言語に於ける単位と単語について」『文学』7-3
- 中川秀太（2015）「漢語・外来語の略語」『日本語学』34-2
- 西尾寅弥（1965）「やまとことばの可能性」『言語生活』169
- 野村雅昭（1977）「造語法」『岩波講座日本語 9 語彙と意味』岩波書店
- 野村雅昭（2016）「わかりやすい日本語とは何か」『わかりやすい日本語』くろしお出版
- 野元菊雄（1976）「漢字の造語力」『創造性研究』1-1
- 芳賀綏（1979）「和語ばなれ」『月刊言語』8-9
- 堀井令以知（1965）「単語・連語の構成論の方法」『口語文法講座 1 口語文法の展望』明治書院
- 水谷静夫（1978）「和語と漢語の造語力」『「ことば」シリーズ 8 和語漢語』大蔵省印刷局
- 屋名池誠（2004）「地域差・世代差・ことばの正しさ」『言葉の「正しさ」とは何か』国立国語研究所
- 山田忠雄（1977）『国語学概論 1・2』日本大学通信教育部
- 米川明彦（2022）「現代は俗語の時代」『ユリイカ』54-10